《野球小僧ノンフィクション》

渡米12年目を迎える大家友和
MLB通算51勝、"TOMO"の流儀

ベースボールと社会奉仕。「もうひとつの顔」を持つ理由……

――メジャーで培ったベースボール・スピリッツ

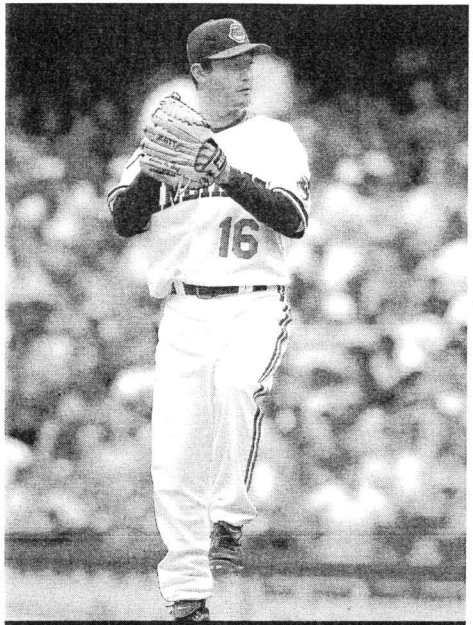
文・岡　邦行／写真・藤原嗣治

日本では大成することができなかった大家友和は、メジャー挑戦によって才能が萌芽し、開花した。メジャー生活11年で通算51勝し、現役の日本人メジャー投手のなかで最多勝を誇っている。

と同時に大家は、もうひとつの顔を持っている。社会奉仕というスピリッツだ。毎年オフに帰国すると、立命館大学で経営学を学ぶ一方、NPO法人を設立。社会人クラブチームと少年野球チームを運営している。さらに毎年夏には子どもたちをアメリカに招待している……。

机の上に積まれているファイルブック。ときおり私は、それらを取りだしては読み返す。

その中でもアメリカ在住のスポーツライターである谷口輝世子さんが、体育専門月刊誌『体育科教育』に5年ほど前に連載した「アメリカ・プロ選手　もうひとつの顔」というタイトルの記事を好んで読んでいる。それらの記事にはアメリカの4大プロスポーツ（MLB＝野球、NBA＝バスケットボール、NFL＝アメリカン・フットボール、NHL＝アイスホッケー）の名の知れた選手たちの多くが積極的にチャリティ活動に参加し、ボランティア精神に徹する「もうひとつの顔」が詳細にレポートされているからだ。



■大家友和（おおか・ともかず）

1976（昭和51）年3月18日生まれ、京都府出身。185センチ91キロ、右投両打。京都成章高～横浜～レッドソックス～エクスポス～ナショナルズ～ブリュワーズ～ブルージェイズ～インディアンズ。高校3年夏は、府大会決勝で敗れるも、28イニング連続無失点、42奪三振、防御率0.72をマーク。93年横浜のドラフト3位指名を受け入団。98年に自由契約となると、レッドソックスとマイナー契約を結び、99年シーズンはAA、AAAと勝ち星を挙げ続け、マイナーリーグのオールスターに先発投手として出場。同年7月、日本人9人目のメジャーリーガーとしてデビューを飾る。その後チームを転々とし、メジャー通算勝利は51勝を数える。2009年はインディアンズで2年ぶりにメジャー昇格を果たした。今季の所属は未定。

写真提供＝TKOアソシエーツLLC

MLBで前人未到の2632試合連続出場を果たし、2001年限りで現役生活から引退したカル・リプケンは、奉仕活動に熱心な選手としても有名だ。99年オフに野茂英雄とともに、ハワイで日米の子どもを招待。野球教室を開催したことは知られている。

が、当然それだけでは終わらない。引退後は出身地のメリーランド州に少年野球リーグや、野球教室のために使用する球場と宿泊施設を建設。子どもたちに指導することをライフワークとし、スポンサーを募って〝リプケンベースボール〟を組織化している。

さらにリプケンは、メジャーリーグの監督だった亡き父にちなみ〝カル・リプケンシニア基金〟を設けている。とくにアメリカの治安の悪い下層階級で育つ子どもや、貧困に苦しむ子どもたちのケアに力を入れ、定期的に全米各都市を訪ね、野球を通しての奉仕活動を展開している。基金はリプケンの本やグッズ類の売上金、ファンからの寄附金で成り立っているという。

同じMLBのバリー・ジト（ジャイアンツ）は、国を離れて他国の紛争地域に派遣され、負傷した米国人兵士を思い〝ストライクアウツ・フォア・トゥループス（兵士のために三振を）〟を設立。自らが三振をひとつ奪うごとに、100ドルを寄附している。

そんなジトに賛同した選手も多い。投手とは違い、野手の場合はヒットを打ち、打点を稼ぎ、ホームランを放つたびに寄附金をだしている。

一時はアルコール依存症に悩まされていたものの、1年かけて病魔から克服したNHLのダレン・マッカーティは、ガンで苦しむ父の姿を見て〝マッカーティガン基金〟を設立。ガン研究施設、ガン患者を支えるサポートグループに寄附する一方、自らパンクロックバンドを結成し、オフになると演奏活動に余念

がない。それというのも事故や怪我などで引退を余儀なくされたトレーナーたちスタッフ、チームメイトのことを考え、経済的支援をするためだ。

そのような社会貢献を認められたマッカーティは、03年にNFLから〝グッドガイ賞〟を贈られた。

NBAのスーパースターだったマジック・ジョンソンは、なんと91年11月に健康診断でHIVに感染していることを公表した。その突然の衝撃にファンは、いずれ彼はエイズで死んでしまうのだろうと悲しんだ。しかし、ジョンソンはエイズと向き合い、果敢に闘った。男性の同性愛者だけに感染するものと思われていたが、複数の異性と関係したことを告白。積極的にエイズ予防の講演をする一方、〝マジック・ジョンソン基金〟を設立し、エイズ研究や、予防に役立てるためにこれまで10億円以上の寄付金を集めているという。

選手専用食堂の食物が残れば、それらを集めて翌朝、教会にやってくるホームレスたちに提供するメジャーリーガーもいる。オフに大学に通い、福祉学などを身に付け、引退後の社会奉仕活動に備える選手も多い。

その中には大学を中退してNFLの選手となったバイロン・ホワイトのように、引退後に大学に復帰。法学の全課程を修了し、最高裁判事にまで登りつめた選手もいるから驚いてしまう。

もちろん、選手だけではない。組織もまた選手とともに社会貢献に参加している。

全米の主要都市に本拠地を持つ、プロバスケット30チームを統括するNBAは、チームの職員、スタッフ、選手が一体となって〝読書推進運動〟を展開している。「読書の習慣が身に付けば、少年たちに広い視野を与えることができる」と考え、子どもたちを集め、シーズン中も読書会を開いているのだ。

アメリカン・フットボールのNFLは、毎年2月にユニークな表彰を行っている。その表彰とは毎シーズン、選手たちが少年時代に指導を受け、影響を与えた恩師に対する思いを選手自身に綴らせている。その中からもっとも素晴らしい教師を選出し、試合に当の教師を招待。選手立会いのもとに〝ティーチャー・オブ・イヤー〟の賞を贈るというのだ。

「この賞は、選手に影響を与えた恩師を、単に讃えるためのものではありません。選手と同じように、子どもたちにも自分の先生に対する尊敬の思いを寄せて欲しいからです」

賞を設けた理由を、NFLは以上のように説明している……。

このオフ、2月のキャンプインを前に私は、机の上にあった谷口さんの連載記事のファイルを手にし、あらためて読み返した。

そして、今シーズンもまたメジャー挑戦を掲げ、トレーニングに励む大家友和に会いたいと思った。大家もまた「もうひとつの顔」を持つ選手だからだ。

＊　＊　＊

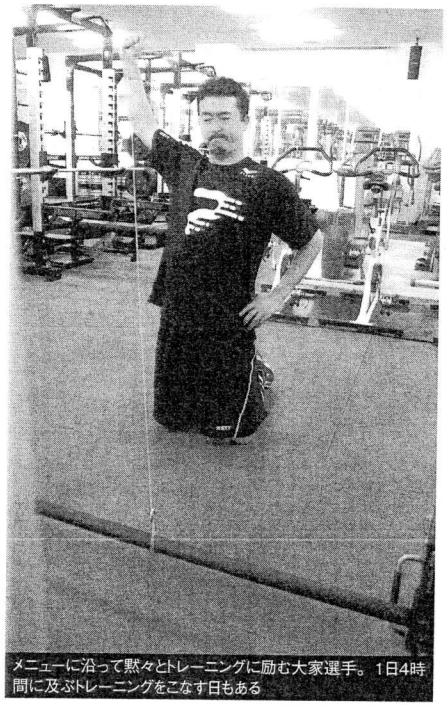
京都駅からJR東海道線下り、米原行の快速に乗って20分。南草津駅で下車し、タクシーに乗れば10分ほどで立命館大学びわこ・くさつキャンパスに着く。

シーズンオフは立命館大学に通いながら、くさつキャンパスのトレーニングルームで汗を流し次のシーズンに備える

そのキャンパスの外れにあるアメリカン・フットボール部グリーンフィールドに隣接する、真新しいマシーンが何台も備えてあるトレーニングルーム兼クラブハウス。毎シーズンオフになると、その施設に京都市内の自宅から車で通う大家は、体がなまらないようにトレーニングに励み、さらに強化するために汗を流している。

2月初旬、私が訪ねた日も大家は、ひたすらマシーンを相手にトレーニングをしていた。

「ここの設備はすごいですよね。たぶん大学のトレーニングルームとしては最高じゃないですか。助かります」


メニューに沿って黙々とトレーニングに励む大家選手。1日4時間に及ぶトレーニングをこなす日もある

そういいつつ大家は、手元にあるノートに視線を落とし、細かく書き込まれたメニューを確認する。インターバルをとりながらメニューをこなしていく。毎年、10月中旬にアメリカから帰国後のシーズンオフに入ると、1日4時間以上、ときには夜の9時近くまで及ぶトレーニングに余念がないという。

この日のトレーニングは、午後7時前に終了した。午後9時からの取材予定だったため、気遣ってくれたのだろう、大家自らが運転する車に、私とカメラマンを同乗させて移動。午後8時前には京都市内にある、馴染みの焼肉屋に案内してくれた。

大家は、これまでの野球人生を語った。

03年の3月に大家は、地元・京都の立命館大学の社会人入試に挑戦して、みごと合格。これまでの7年間、たとえ休学期間はあったにせよ、オフの帰国中は経営学部の講義を一般学生とともに受けている。

つまり、プロでありながら、れっきとした大学生なのだ。

「ずっとこれまでオフになると時間を持て余していたしね。そもそも大学入試を受けてみようか、と思ったのは単純に大学に行ってなかったからです。まあ、アメリカではマイナーの選手がオフになると大学に通っているという話も聞いていて、たぶんにその影響もあったのは事実ですね。そこで僕は、大学に入るにはどうすればいいかと、調べてみたら社会人入試があったため、受験することにした。受験勉強？　そんな大げさなことはしなかったですよ。面接と、どうして大学に入るのかという理由を自己推薦書に書き、あとは与えられたテーマの論文を書いた。それだけだから、これといった受験勉強はしていない……。

経営学部を選んだのは、この先もずっとスポーツの世界で生きたいと思っているから。そのためにはスポーツ・ビジネスというか、マネジメントの勉強をし、組織を運営する方法なりを身に付けなければならないしね。野球以外のことを知ることにより、人並みに世間のこともわかってくる。そういうことを考えると、経営学部が一番適しているんじゃないかと思った。ただし、僕は優秀な学生でないため、けっこう苦労していますね。このオフに集中的に講義を受けたり、レポートを提出したりしなければならないですから」

ベースボールと社会奉仕。「もうひとつの顔」を持つ理由……

そういって苦笑しつつも大家は、ほどよく焼けた肉を「美味しいですから、熱いうちに食べてください」といい、私とカメラマンの小皿に運んでくれる。

ウーロン茶を口にし、つづけていった。

「……たとえば、駅の売店にスポーツ新聞と日経新聞が並んでいたとする。そのとき野球だけ、スポーツだけをやっている者なら迷わず、スポーツ新聞を手にすると思う。でも僕は、この不景気な世の中だしね、やっぱり日経新聞のほうを買う。景気が気になるし、よくなって欲しいですから。だから、スポーツ新聞にスター選手が何億もの大型契約を交わしたなんていう記事が載っていても、まったく気になんない。一般の人と同じように、僕も世の中の景気のほうが気になるしね。

うーん、これまで野球選手をやってきて、あまりにも野球以外のことを知らない人を見てきたし、自分自身も野球の世界しか見てこなかった。でも社会を生きて行くには、世間を知るべきだと思うし、そうでないと社会人として成長できない。それが大学に入ったひとつの理由ですね……」

大家は、真顔でいった。

そういう大家の話に耳を傾けながら私は、ふと思った。現役を引退し、解説者になった衣笠祥雄氏を取材した当時を思いだしたのだ。

〝鉄人〟と呼ばれ、国民栄誉賞を受けていた彼は、私に次のようにいっていた。

「引退してわかったんですが、社会人としては失格ですね。高校卒業してプロ入りした後は、寮住まいだったしね。野球だけをやっていればよかった。しかし、こうして引退すると戸惑うことばかり。飛行機に乗ろうとしても、どうやってチケットを買えばいいのかわからないんですから……」

大家の言葉に私は、以上の衣笠の話をダブらせたのだった。

立命館大学経営学部に社会人入学を果たした大家は、さらにもうひとつの顔を持つようになった。

NPO法人「フィールド・オブ・ドリームス」を、立命館大学関係者たちと03年に設立し、新年を迎えた04年2月から活動を開始した。その手始めに少年野球に着目し、滋賀県の中学生を対象にした硬式野球チーム〝OBC（大家ベースボールクラブ）草津リトルシニア〟を発足させた。

その理由を、大家はこう説明した。

「少年野球は自分の野球の原点だしね。だいぶ前から、いずれは少年野球チームをつくりたいと思っていた。毎年のオフに少年野球教室に呼ばれて指導していたけど、疑問を感じていた。指導者たちはどんな思いで野球を子どもたちに教えているかわからないけど、子どもたちを前に怒鳴ったりしている。その割にはきちんとボールの握り方、キャッチボールの仕方といった基本的なことを指導していない。そういったことを見ていると、子どもたちは本当に野球を楽しんでいるのかという疑問がある。指導者を恐れて、顔色をうかがいながら野球をしている感じだしね。あれじゃあ、好きな野球が嫌いになってしまう。やっぱり、まずは野球の楽しいんだということを教えてやらないとダメだね……」

2004年に発足した草津リトルシニア（パンサーズ）では、基本技術を子どもたちに教えている。写真提供＝TKOアソシエーツLLC

つづいて翌05年の10月には滋賀県高島市を本拠地とする社会人クラブチームの〝OBC高島〟を発足させた。

このことについても、大家は説明した。

「もともと少年野球よりも先に、社会人のためのクラブチームを発足したかった。世の中が不景気のため、どんどん企業チームが休部や廃部に追い込まれているしね。ただ金銭面を考えると社会人クラブチームをつくる場合はかなりの資金を用意しなければならない。その点、少年野球チームの方がつくりやすかったため、少年野球のほうが先になってしまった……。

別に『社会人野球の灯を消してたまるか！』といった、大げさなことは考えていないけど、高校や大学を卒業した選手が、野球をつづける場所が少なくなっているのはたしかだしね。偉そうに聞こえるかもしれないけど、野球をつづけたい人にチャンスを与えたかった。それに僕の場合、社会人野球の経験はないけど、いずれは社会人野球チームを運営したいという気持ちがある。それなりに資金はかかるけど、高校（京都成章高校）の後輩たちが一生懸命に手伝って協力してくれている。ありがたいよね」

そういって大家は、小さく頷いた。

毎シーズンオフ、日本に帰国すると大家は、大学に通う一方、少年野球と社会人クラブチームの運営をこなしている。

こうして社会奉仕活動に努めているのは、昨年まで11年間にわたってメジャーでプレーし、そこで培ったベースボール・スピリッツが生かされたといってよい。

写真提供／共同通信社

1993年のドラフトで横浜に指名された選手たち。左から、万永貴司内野手、川崎義文捕手、波留敏夫内野手、河原隆一投手、大家友和投手、西沢洋介投手

16年前の94年、ちょうど今頃だった。前年の93年秋、ドラフト会議で横浜から3位指名受けて入団を果たした高校卒の大家は、キャンプでの調整も順調に進んだ。

そして、4月初旬の開幕が10日後に迫った3月下旬。1軍のオープン戦である近鉄戦に同点で迎えた9回表だった。大家は、1イニングだけ登板した。結果は、無安打、無失点。18歳になったばかりのルーキーは、打者3人に対し、わずか9球で完璧に抑える好投をやってのけたのだ。

当然、当時の監督近藤昭仁は、思わぬルーキーの出現に目を見張り、試合後に番記者たちを前に相好を崩していった。

「投げるのを初めて見たよ。いい投げ方をしている。ナイスピッチングだ」

これを契機として大家は、首脳陣から期待されるようになった。事実、開幕から1軍リスト入りし、開幕2週間後には1軍登録をされている。

大家は、遠い日を振り返った。

「オープン戦で打者を抑えたときは正直いって、たまたまだろうっていう感じでね。へんに舞い上がることはなかった。それで開幕を迎え、たしか1軍に登録された翌日の4月27日だったと思う。中日戦に登板しているよね。結果的に2回3分の2を投げて、失点ゼロに

抑えたと思う。たしかに高卒のルーキーとしては上出来だったけど、それよりもデビュー戦で一番印象に残っているのは、子ども時代から憧れていた中村武志さんのいる中日戦でデビューできたことだね。

中村さんと僕の家は近所で、母親同士が親しくって、よく野球のシャツなどのお下がりや、中日の野球帽をいただいてたんです。たしか僕が小学4年のときだったんじゃないかな。中村さんがドラフト1位で、花園高校から中日に入団したときは『すごいなあ』って思っていた。だから、中村さんのいる中日戦でデビューできたことが何よりも嬉しかった」

そのようなデビュー戦の思い出を語る大家は、その日から2日後にプロ初勝利を飾ったのだった。

4月29日、横浜スタジアムでの対ヤクルト戦のときだった。2対4とリードされて迎えた8回表、ツーアウト走者二塁の場面だ。再びマウンドに上がり、デビュー戦同様に好投した。1番打者の飯田哲也を難なく外野フライに打ち取り、ピンチをしのいだのだ。

そして、8回裏に一挙に6点をあげて横浜は逆転。なんと投げた打者はひとり、それもたったの3球しか投げなかった大家が勝利投手の権利を得たのだった。

しかし、このときも喜びはそれほどでもなかったという。

「考えてみれば、中途半端な勝ち方だよね。たった3球しか投げないのに勝つなんて。たしかにルール上では勝利投手になるけど、僕としては複雑な心境でしたから……」

今でも大家は初勝利の感想を、そういっている。が、当時のマスコミは、勝利を掌中にした高卒ルーキーを讃え、大きく報じた。

――青春をオオカ（謳歌）する18歳の若武者。3球初勝利！

ちなみに高卒ルーキーが1年目、それも4月に初勝利をあげたのは、1970年の近鉄の太田幸司以来、実に24年ぶりだった……。

インタビューを始める前に大家は、私に念を押すようにいった。

「僕がアメリカに行ったのは、日本が嫌いになったからではないんです。あくまでも僕がやりたいこと、目指していることをアメリカは受け入れてくれただけ。だから、日本とアメリカを比較することはできないし、比較したくない……」

この大家のいわば牽制球ともいえる言葉に、私は少なからず面食らってしまった。黙って頷くほかなかった。思うにこれまで何回となく〝野球〟と〝ベースボール〟の違いを質問され、自分の真意とは違った報道――日本プロ野球指導者たちの不甲斐なさを大家の意見として報じられてきたのかもしれない。

ともあれ、今回初めて私は大家に接したのだが、繊細な心の持ち主だということは当然として、取材を進めていくうちに、あまりにも正直であるがゆえに、何事においても深く考えてしまうタイプの人だということは理解できた。

取材中に大家は、こんなことをいった。

「たとえば、先発した僕が打ち込まれた場合、新聞記者は『大家、リリーフに降格！』と書く。じゃあ、リリーフ投手は先発投手よりも落ちるのかと、そう僕は思う……」

横浜時代の大家は、たとえ憧れていたプロ野球界に入ったとしても、決して浮かれることはなかったようだ。一人前のプロ選手になることを目指して努力すると同時に、ひたすら世間でも通用する普通の社会人になりたいと思った。

「だれとはいわないですが……」

と、大家は強調した。前置きし、次のようにいった。

「子どもの頃から親や大人たちから、よくいわれましたよね。『ちゃんと挨拶しなさい』とか『時間に遅れるなよ』『勉強しろよ』『他人には迷惑をかけるなよ』なんて。そういった教育というか、一般常識や世間のルールを親たちに教わった。もちろん、ルールを破ると怒られ、『立派な大人になってもらいたいんや。だから、怒るんだ。しっかりせい！』とね。ところが、プロ入りしたら何かおかしい。周りを見ると『この人たちはどんな教育を受けてきたんだろう？』という疑問があった。挨拶しているのに、無視されてしまったりね……。

まあ、プロ入りしたときから僕は、少しとんがっていて、生意気だったこともたしかだった。そのために周りの先輩たちは『ヘンな奴だな』と思っていたかも知れないけど、プロといっても社会人だし、挨拶したら挨拶をするのは当然じゃないかと。だから、常に『本当にこれでいいのかな？』と思っていた。プロの世界に入って、たしかにほかの世界では学べないことも多く学んだけどね。しかし、納得できないこともあったのは事実でしたね」

キャンパスでは学食で昼食をとることもあるが、周りは気がつかない

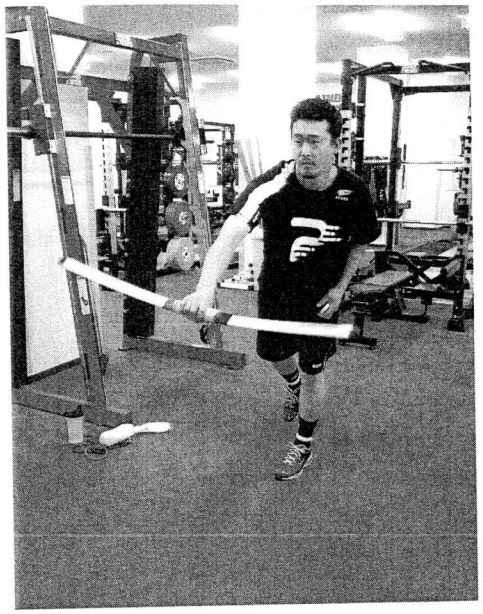
大家は、横須賀市長浦町で寮生活を送っていた横浜時代をつづけて語った。

「休日になると、よく寮から歩いて行ける京急線の安針塚（あんじんづか）駅から電車に乗り、品川で乗り換えて山手線で渋谷に行っていた。消防署のあるファイアー通りを歩き、メジャーリーグショップに向かう。ま、メジャーリーグのグッズ類は見ているだけでも飽きないしね。

メジャーに憧れていた？　……別に決まったチームを応援していたわけではないけど、当時は野茂（英雄）さんが活躍していたしね。中学生の頃かな、NHKがメジャーリーグを中継していたため、よくテレビで観戦していた。憧れたというよりも、遠い世界を見ている感じかな。高校に入ってからはメジャーのトレーニングなどを真似していたね。今も大事に持っているけど、ノーラン・ライアンの『ピッチャーズバイブル』を読んでは真似をしていた。唯一真似ることができなかったのは、中4日の調整法かな。理由？　高校生は土曜日か日曜日の試合でしか投げられないから、中6日の調整法はどうすればいいんだ、なんて。自分なりに悩みながらも考えていた。

まあ、横浜時代は仲間と一緒に遊びに行くことはほとんどなかった。別にチームメイトを避けていたわけではないけど、同期入団した選手は大学卒か社会人出身者で、高卒選手は僕だけだったしね。たぶん、寮住まいの選手たちは横須賀あたりで遊んでいたと思うけ

ベースボールと社会奉仕。「もうひとつの顔」を持つ理由……



ど、僕の場合は渋谷に出てメジャーリーグショップに行く方が多かったね」

メジャーリーグショップに顔をだし、専門誌、ビデオ、シャツ、ポスターなどを買い求めた。そのたびに大家は、海の向こうの世界に夢を馳せたのだろう。当時の寮の部屋には、野茂英雄とノーラン・ライアンのポスターが貼られていた。

横浜に入団した94年のシーズンの大家は、前述したように登板2試合目、それもわずか3球を投げただけで初勝利を掌中にした。

しかし、その後は運に見放されたように勝ち運に恵まれず、98年まで5年間在籍したものの1軍での通算成績は、1勝2敗。5年目の98年のシーズンには2軍のイースタンリーグとはいえ、最優秀防御率を記録していた。が、首脳陣との関係がぎくしゃくしていたと思われる。1軍のマウンドに上がったのは2試合のみであった。

そのような横浜時代を送っていた大家が、フロントや首脳陣に直訴し、活躍の場をアメリカに求めたのは98年のオフだった。そして、翌99年3月初旬、23歳になる2週間ほど前だった。成田空港を飛び立った大家は、フロリダ州フォートマイヤーズのレッドソックスのキャンプ地に向かった。

大家友和のメジャーへの挑戦が始まった。

「すべてにおいてプラス思考で立ち向かうことにした」

大家は、そういっている。

たとえば、渡米した当時は英語での意思疎通に苦労したというが、常に前向きに練習をやることを自身に課した。

――たとえ結果が悪くとも滅入ることなく努力する……。

――1日20ドル支給されるミールマネーに感謝し、体力をつけるために何でも食べる……。

――オープン戦では日本とのストライクゾーンの違いを見極める……。

――アメリカ製のボールに慣れ、試合の雰囲気や外国人打者の癖などを把握する……。

とにかく、野球ができることが一番の幸せだと考えていた大家は、ただひたすらメジャーリーグ昇格を狙うことにした……。

練習を終えて宿舎に戻っても頭にはベースボールがあった。ESPNでメジャーリーグを食い入るように観た。マウンドの投手に自分を投影させ、ピッチングを研究した。

ともあれ、真面目な大家の野球に対する真摯な態度が功を奏した。

99年の1年目のシーズン開幕を大家は、レッドソックス傘下のダブルAチームであるトレントン・サンダーに在籍することになった。

大家はいった。

「メジャーに挑戦した当初は、正直いって1年で1ランクアップしても、メジャー昇格は3年、いや少なくとも4年はかかるだろうという計算をしていた。早ければ25、6歳で昇格できればいいなってね。

ところが、いきなりダブルAからスタートすることができたからね。その上、3カ月後にはメジャーに這い上がることができた。想定外でしたね」

そして、99年4月10日。この日を大家は忘れない。ダブルAの開幕戦の対ビングハムトン・メッツとの2戦目に先発した大家は、被安打2の無失点で初登板を白星で飾ったからだ。この活躍で首脳陣の信頼を得て、その後は中4日のローテーションで先発することになり、いつしか〝TOMO（トモ）〟の愛称でチームメイトから親しまれるようになった。

順調なスタートを切った大家は、トレントン・サンダーのエース格として2カ月間で12試合に先発登板。マイナーリーグといえども、なんと負けなしの8連勝し、6月半ばにはトリプルAのポータケット・レッドソックス（通称・ポーソックス）に昇格。遠征先への移動もバスから飛行機に変わった。

――トモ、何も変える必要はない。投球フォームも練習の仕方も今までの方法でやりなさい……。

そういってポーソックスのコーチは、トレントン・サンダーのコーチと同様に、大家の意見などを聞いてコミュニケーションを図ってくれた。無意味な練習を押し付けることなく、何よりも選手を信用してくれたのだ。コーチが主に大家にアドバイスしてきたことは、日本選手にありがちな練習熱心さについてだった。コーチはいった。

――トモ、練習はほどほどにな。あんまりやり過ぎないように……。

この日本とは違ったアメリカ流指導法が、大家の才能を一気に萌芽させ、開花させたといってよい。

渡米して1カ月後の4月初旬。トリプルAでのデビュー戦に7イニング投げて、被安打3、9奪三振、無失点に抑え、勝利投手となった。その後の2戦目も3戦目も勝ち、なんと気が付けばマイナーリーグで負けなしの11連勝を飾り、7月半ばに念願のメジャー昇格、ボストン行きを命じられたのだった。

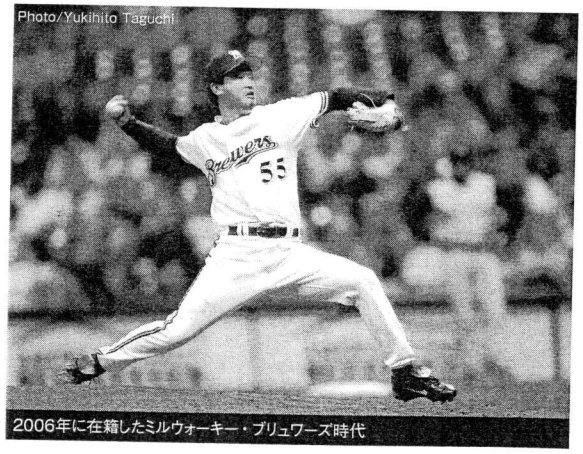
メジャー昇格後の大家は、ボストン・レッドソックスで8試合に登板。1勝2敗の成績を残して99年のシーズンを終えた。

以来、ベースボールを肌で感じ、その世界を思いきり吸収した。社会奉仕のスピリッツも学びつつ、昨シーズンまで11年間にわたってメジャーリーグでプレーしている。11年間のうち02年と03年のボストン・レッドソックスでのシーズンは、13勝（8敗）と10勝（12敗）をあげ、ワシントン・ナショナルズとミルウォーキー・ブリュワーズの2チームでプレーした05年のシーズンには、11勝（9敗）の2ケタ勝利を掌中にしている。

99年から11年間で現役の日本人投手としては最多の通算51勝（68敗）を誇っているのだ。

また、2年目の2000年6月1日にはトリプルAといえど、マイナーリーグ（インターナショナルリーグ）でパーフェクトゲームを達成している。100年以上の歴史を誇るマイナーリーグにおいて史上3人目、実に47年ぶりの快挙であった。

大家は、昨年までのメジャー生活を振り返った。



Photo/Yukihito Taguchi

2006年に在籍したミルウォーキー・ブリュワーズ時代

「やっぱり、アメリカは僕を受け入れてくれた、という感じかな。1年目の99年のシーズンにマイナーで15勝、それも負けなしの連勝で15勝した。運もよかったんじゃないかな。僕が打たれたときは、チームメイトが打って点を取ってくれたしね。おたがいメジャー昇格を狙い、ベストの状態で必死になってプレーする。マイナーの監督やコーチにも恵まれたよね。

たとえば、15連勝した次のシーズンに僕は、マイナーリーグで4月に4連敗した。0勝4敗ね。しかし、前年と同じように首脳陣は、文句ひとついわずに信頼してくれた。『トモ、おまえまた打たれたのか。力が落ちたな』なんていう言葉は、絶対に浴びせない。僕の意見をきちんと聞いてくれるしね。アドバイスも惜しまない。すごくやりやすい。それは事実ですね……」

06年のシーズンは右肩と右脚太腿の故障に見舞われ、故障者リストに入っている。ここ4年間は低迷しているものの、クリーブランド・インディアンズに在籍した昨シーズンは、1勝（5敗）と数字を見る限りでは振るわなかったものの、18試合に登板している。2月末の時点では、まだ今シーズンの在籍するチームは報じられていないが、体調万全の状態でオファーを待っているという。

＊　＊　＊

大家は、決して口数の多いほうではない。しかし、巷間伝えられているように、決して無愛想で気難しい男でもない。言葉ひとつひとつを分析するように話を聞いては、逡巡しながら質問に応じる。

そのような大家が、私にようやく心を開いてくれたのは、インタビューを開始して30分ほどが経ってからだった。高校時代の思い出を語りだした頃からだ。

再び京都の焼肉屋。手際よく焼きあがった肉を、私の小皿に運びながら、大家はいった。

「中学まで軟式野球をやっていたから、高校入学当時の僕は真っ直ぐしか投げられなかった。監督に『大家、カーブを投げてみろ』といわれても、投げ方を知らないためにどうにもならない。そこでノーラン・ライアンの『ピッチャーズバイブル』を読んで真似して投げてね。3年になる前、ちょうど今頃にようやくカーブをマスターすることができた。

そんな僕だからプロ入りできるなんて夢にも思わなかった。2年までは試合で投げることもなかったしね。3年の春季大会までは、背番号10の2番手ピッチャーだったし、夏前には1番になってね、甲子園を目指した京都府大会では投げたけど、甲子園には行けなかった。だから、プロ入りは無理だと思っていたんですが、横浜が指名してくれた……」

大家は焼肉を頬張り、ウーロン茶をすすった。一拍置いてからつづけた。

「だから、横浜には感謝しています。1勝しかできなかったけど、5年間も在籍することができたし、アメリカ行きも認めてくれたしね。プロ入りした当時は、10年プレーできればいいと考えていたけど、アメリカに行って丸11年、今年で12年目。横浜時代を入れると17年目ですからね。

まあ、あっという間に過ぎた感じかな。一応、

質問に対してはひとつひとつ言葉を選ぶように語り、謙虚で真面目な人柄が伝わる

波乱万丈の野球人生を送っているしね。故障をしながらも復帰したり、アメリカでは9チームも渡り歩いている。勝ち星は51勝だけど、お金じゃ買えない経験をしている。けっこう中味の濃い経験をしている。やってみろよ、といわれてもやれない経験を僕はしてきたと思うな……」

そして、あらためて大家はNPO法人「フィールド・オブ・ドリームス」を設立したことについて語った。

「立場としてはゼネラルマネージャーだけど、社会人クラブチームの〝OBC高島〟を発足する際は、正直いって人件費もかかるしね。初期投資が大変だった。練習用グラウンドを借り、地元の企業の寮やトレーニングルームも確保しなければなかったしね。でも、発足してよかった。今のアマ野球界は元気がないし、指導者も少ない。見ていると『その采配は何なの?』ってことも多いしね。そういうのを見てしまうと、きちんとしたチームをつくらなければと思ってしまう」

少年野球の〝OBC草津リトルシニア〟についても語った。また、大家はチャリティの一環として、01年から毎年夏休みの期間中に子どもたちをアメリカに招待。子どもたちと触れ合う機会を持っている。一緒に食事しながら、人生や野球について語り、メジャーリーグを観戦させ、その素晴らしさを伝えている。

「昨年までの9年間に延べ94人の子どもたちをアメリカに招待している。今年でなんとか100人を突破したいと思っているけど、別に100人を突破することが目的じゃないしね。要は継続して毎年子どもたちを招待できるように、僕自身が頑張ることだね。

始めた理由? まあ、OBC草津リトルシニアを発足させた理由と同じだけど、僕の家庭は決して裕福ではなかったしね。補助金を受けなければならない家庭で、少年時代を過ごしていたからね。だから、その恩返しというか、少しでも還元したい。もちろん、僕ひとりでやっているのではなく、全面的にサポートしてくれるスタッフがいるためできることでね。だから、スタッフには感謝していますね」

大家は、真っ直ぐな視線でいった。

私は思わず口を挟むようにいった。

「大家さんは、かなりの真面目人間ですね」

それに対し大家は、初めて笑みを見せた。

「いや、それは野球の話をしているので……」

時計の針が深夜の11時を指していた。焼肉屋をでた大家は、私とカメラマンにいった。

「この時間帯ではタクシーはつかまりませんからね。ホテルまで車で送りますよ」

何気なく気遣う言葉には、この3月で35歳を迎える大家なりの優しさがこもっていた。

2001年から始められた「大家友和ドリームツアー」は、今年で10回目を迎える。写真はシカゴ・ホワイトソックス傘下のAAAシャーロット・ナイツ時代（2008年）。写真提供＝TKOアソシエーツLLC

●岡邦行［おか・くにゆき］
1949（昭和24）年生まれ、福島県出身。法政大学社会学部卒業。ルポライター。スポーツを中心に取材執筆を展開。99年、『野球に憑かれた男』で報知ドキュメント大賞受賞。単行本化。近著は『伊勢湾台風―水害前線の村―』。

●藤原嗣治［ふじわら・つぐじ］
1946（昭和21）年生まれ、岡山県出身。中央大学在学中から写真をはじめ、『週刊大衆』、『週刊文春』、『月刊文藝春秋』、『アサヒグラフ』などに作品を発表。『フォーカス』創刊を機に写真に加え文章へも活動範囲を広げ、『女性セブン』、『サライ』などの取材をする。フォトジャーナリスト。